
ラブの思い出 ~初の女性刑務官~

なおこ Naoko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブの思い出 ～初の女性刑務官～

【Nコード】

N5612Q

【作者名】

なおこ Naoko

【あらすじ】

この小説は、私がアメリカで知り合った、ラブと言う女性から直接聞いた彼女の経験を元にして書いたものです。ラブは、カリフォルニア州の刑務所で、最初の女性刑務官になった人でした。そして彼女の姉を通して、ある事件の究明に関わります。彼女がそれに関わったことは、このアメリカでは少数の人にしか知られていません。恐らく、記録にも残っていないでしょう。彼女は、関係者に感謝されるだけで良かったからです。そんな、アメリカ人も知らない話を、日本人の皆さんに知っていただきたくて、フィクションも交えて書

いてみました。(年代や年齢も、私の創作です)

1話 シングルマザー

1970年代後半、初夏のサンフランシスコ。

週末の朝、ラブはベッドで目が覚めた。

少し開いたカーテンの隙間から、乳白色の朝霧が見える。

この季節、サンフランシスコは霧が多い。

ラブは、30歳代のシングルマザーだ。

そして二人の子供たちとアパートの二階に住んでいる。

長女の名前はアマンダ、弟はベンジャミン、二人ともティーンエイジャーだ。

彼らはもう出かけたらしく、部屋の中は静かで、外から、かすかに車の音や人の声が聞こえる。

子供たちは、もう幼子のような手間はかからないけれど、反抗期という別の問題はあった。

それはラブを悩ませる。

とは言え、仕事と家事に追われる毎日で、母親として彼らにかまってやれる時間はさほどない。

ラブは、まだ疲れの残っている重い体を起こすと、キッチンへ行き、冷蔵庫を開けた。

そしてオレンジジュースの入ったボトルを取り、それをグラスに注ぐ。

その時、ドアのベルが鳴った。

ラブは、アマンダが忘れ物をしたのかと思う。

彼女はそうやって、忘れ物を取りに戻ることが多い。

ラブはオレンジジュースを飲みながら玄関へ行くと、ドアを開ける。

すると、そこに立っていたのはアマンダではなく、品の良い婦人だった。

「ジョーン……」

ラブはそう言って立ちすくむ。

ジョーンは、ラブの姉だ。

ロサンゼルスに住んでいる。

そしてこの二人は、長い間、会っていなかった。

この二人は、子供のころは仲の良い姉妹だった。

ところがラブにボーイフレンドができると、二人の関係は険悪になる。

ジョーンは、彼のことを気に入らなかったのだ。

彼女は、ラブのボーイフレンドはアルコール中毒の両親がいて、素行もあまり良くないと言った。

それに対し、ラブは、ジョーンの偏見だと答えた。

もちろんジョーンも、そんな環境で育っても立派な大人になった人があることは知っている。

とは言え、そんなジョーンの心配は、ラブにとって意味はなかった。人生経験の少ない若い女の子が、自分に優しくしてくれる男の子に熱を上げるのは簡単なことだ。

ラブはそのボーイフレンドと結婚し、東海岸のニュージャージー州へ移り、二人の子供が生まれる。

そしてジョーンが心配していた通り、夫はアルコール中毒になり、離婚し、カリフォルニアへ戻ってきた。

ラブは戻っても、ジョーンには連絡しなかった。

ジョーンのことを怒っている訳ではない。
それは、ラブのプライドの故で、エゴの問題だった。

ラブは、ジョーンが正しかったのは分かっている。
それでも認めたくなかった。

ジョーンは、良い夫と子供たちに恵まれ、プール付きの大きな家に住んでいる。

ラブとは全く違った世界に生きている人だ。
今更、そんな幸せな奥様のジョーンと話が合わないとも思っている。

ジョーンも、そんなラブの性格は分かっていた。
だからラブがその気になるまで、そのままにしておくことにしたのだけれど、彼女にとってラブは可愛い妹であることに変わりはない。そしてジョーンは、自分から歩み寄ることにしたのだ。

ジョーンは、アパートのドアの外で、ニコニコしながら立っている。
ドアのベルを鳴らす前は、どきどきしていたのだけれど、ラブを見ると自然に笑顔がこぼれていた。

「そんな所に突っ立ってないで、入んなさいよ」
ラブは、無愛想に言った。

ラブはそう言いながら、最後にジョーンに会ったのはいつだっただろうと思う。

子供たちが生まれる前だから、二十年近くにもなるはずだ。
ジョーンはもう40歳になろうとしていた。

もうあの若々しさはないけれど、満たされた専業主婦の匂いがする。
それは、こんな雑然としたアパートに住み、必死に生きている自分を惨めにさせる。

とは言え、わざわざロサンゼルスからやって来てくれた姉に、自分のこの態度はないだろうとも思う。思うが、それしか出来ない。

「元氣そうで良かったわ。

本当に会いたかったのよ」

ジョーンは中に入ると、ラブを抱擁した。

ラブも、一応、ジョーンの背中に手を当てる。

それがすむと、ラブはジョーンをリビングルームへ案内する。

そしてソファの上に置かれていた雑誌や、子供たちが食べるこしたシリアルの入ったボールを片付ける。

「とにかく座って。

この時間だったら、ずいぶん早くロサンゼルスを出たんでしょ？

それとも、昨日来てホテルに泊まった？」

ジョーンは、ハンドバッグを持っているだけだ。

遠出するには荷物が少なすぎる。

「今朝、一番の飛行機よ。

それに、今日中には帰るつもりなの」

「えっ？ 泊まっていかないの？」

そのラブの言葉に、ジョーンは頬をほころばせる。

「嬉しいわね。 泊まってもいいの？」

ラブは、しまったと思うのを隠すかのように答える。

「ロサンゼルスからわざわざ来たんだから、まさか追い返すわけにも行かないでしょ」

「ありがとう。」

そうしたいんだけど、突然だったし、あなたがいないかもしれないから日帰りにしたの」

ラブは、話題を変えようとしてそれに続けて言う。

「そうよ、もし私が仕事に出ていたら、どうするつもりだったの？」
ジョーンは、笑いながらそれに答える。

「そうね、その時は、アマンダとベンジャミンにだけでも会えたらと思っていたの。」

あなたが許すならね」

「許すだなんて・・・別に、会うのを禁じている訳じゃないわ」

「そう、それは良かったわ。」

まあ時間はまだ十分にあるから、今日一日、ゆっくりできるわよ」

ラブは、いつかこんな日が来るとは思っていた。

自分がカリフォルニア州へ戻ってから、何人かの友人や家族とは連絡を取り合っている。

それでも、ジョーンにだけは連絡していなかった。

もちろん、ジョーンが自分を待っているのを分かっていたのにだ。

そしてラブは、そんな自分はなんて頑固者なのだろうと思う。

「ラブは、サンクエンティン刑務所で働いているんですって？」

ジョーンは、キッチンでコーヒーを入れているラブに向かって言った。

「そうよ」

「刑務所だなんて怖くはない？」

「そんなことは言ってもらえないわよ。」

二人の子供を育てなきゃならないんだし」

「そうね・・・」

父親から養育費はもらえないの？」

それを聞いてラブは、笑い出す。

「そんなもの、当てにしていわね。
もう、どっかの街角で野垂れ死んでいるんじゃないの」
ジョーンは、そのラブの言い方から、彼女が苦労したのだと思う。
そしてジョーンが何かを言おうとすると、ラブは笑うのをやめて、
拒否するかのように口を硬く閉めた。

ラブは、同情されるのが嫌だった。
特にジョーンからだ。

そして、強がるように話を続ける。

「とにかく、私は大丈夫。

それに、上司に、コレクションオフィサーにならなかって誘われて
いるの」

「コレクションオフィサー？ 女性の？」

「そう」

「なれるの？」

「まあ、カリフォルニア州では初めての女性のコレクションオフィ
サーになるわね」

「すごいじゃない！」

そのジョーンの言葉に、ラブは少し優越感を覚える。

それまでラブは、この上司の勧めをどうするのか迷っていた。
そして思う。

「そうだ、カリフォルニアで始めての女性のコレクションオフィサ
ーになるう」

生きていくのに必死で、あまり希望の無かったラブは、この時、一
筋の光が見えるような気がした。

2話 困難からの出口

1970年代のアメリカでは、女性の職場における平等問題が広く叫ばれていた。

とは言え、ラブは自分と子供たちを養うことに必死で、そのことについて深く考えてはいない。

もちろん平等であれば、女性の職務領域が広がる。

そうすれば、給料も増える。

それは、ラブにとっても嬉しいことだ。

同時に、女であっても男と同じように仕事をこなすよう要求されることにもなる。

コレクシオンオフィサーとは、日本で言えば、刑務所の刑務官のことだ。

受刑者の改善や矯正などの指導をしたり、時には、体を張って、揉め事を阻止したりする。

ラブは、背は高い方ではなかったけれど、体はがっしりしていた。

そして、気も強い。

当時、刑務所では、女性のコレクシオンオフィサーの候補者について検討していた。

そして、ラブの上司、ゴードンは、ラブが適任だと思ったのだ。

ラブは、ゴードンを尊敬していた。

正義感が強く人徳がある。

彼の誘いは、ラブにとって自分が認められたようで嬉しかった。

とは言え、ラブは即答していない。

ラブは、それまで自分がコレクシオンオフィサーになりたいと思っただけではなく、またその仕事は挑戦でもあったからだ。

自分が先駆者となるのはもとより、肉体的負担も考えなければなら
ない。

特に、女性だと囚人に舐められる恐れもある。

それでも、男子刑務所の方が、女子刑務所よりやりやすかった。

男囚は、女性には敬意や親しみを持つてくれることが多い。

アメリカ人男性は、母親や姉妹を大切にするとところがある。

だから、女性職員にも同じように接してくれたりする。

ところが、女囚はそうではなかった。

女囚は自分の母親との関係が悪い場合が多い。

それゆえ、女性コレクションオフィサーを自分の母親と重ねて忌々
しく思ったりする。

とは言え、それでも女性刑務官が必要とされていことには変わりな
い。

ラブは、ジョーンとの再会がなくても、コレクションオフィサー
にはなっていたかもしれない。

ただ、ジョーンのあの尊敬の念は、ラブにとって快感だった。
自分も胸を張って生きていけるような、そんな気がしていた。

それからしばらくして、試験に合格したラブは、文字通りカリフ
オルニア州の最初のコレクションオフィサーになった。

彼女は男囚の刑務所勤務に着く。

それから、順調な年月が過ぎていく。

ラブは、引き続きロサンゼルスジョーンと連絡を取り合ってい
た。

それはラブが言うより、ジョーンがラブを気遣ったことで、ラ

ブの方からロサンゼルスに行くこともない。

そしてある日、刑務所で、囚人の一人が脱走を図るといふ事件が起こった。

刑務官たちは囚人を捜す。

そうした中で、ラブは、ふと通路で何かを感じ、振り返る。

すると正にその時、巨体の脱走囚人が、ラブの方へ突進しているところだった。

この囚人は、背の低い女性コレクションオフィサーに襲い掛かろうとする。

それは彼にとって、最後の抵抗だったのかもしれない。

ラブは、囚人の襟元を掴むと、後ろへ倒れ、彼の勢いを使ってその巨体を自分の後ろへ投げ飛ばす。

その瞬間、ラブは腰に異変が起きたのを感じた。

投げ飛ばされた囚人は、駆けつけたコレクションオフィサーたちに取り押さえられる。

この囚人は、それから長く、刑務所に閉じ込められることになる。

そして、この日、ラブの女性コレクションオフィサーとしての仕事は終わりを告げた。

ラブの腰は完治するどころか、まともに歩けないほどひどく故障していた。

ラブは、身体障害者になってしまったのだ。

それは彼女にとって、青天の霹靂とも言うもので、これを受け入れ、立ち直るのは簡単ではなかった。

もちろんラブは、自分の不注意だったのも分かっている。

あの巨体を投げ飛ばした時、自分の腰を、少しひねってしまったのだ。

ラブは、ベッドの上で考える。

驚くに値しないと思う。

これが自分の人生なのだ。

少し上向きになると、いつも何かが起こる。

そうして人生は、何度も何度も自分を打ちのめそうとする。

「いや、そう考えてはいけない」とラブは思いなおす。

楽ではなかったけれど、いい思いもしたではないか。

カリフォルニア州の最初の女性コレクシオンオフィサーという名誉も得た。

それで自分の人生は、良かったということにしよう。

ラブは、そう思いながら、むせび泣いた。

ジョーンはラブを心配し、ロサンゼルスに戻るよう勧めていた。

故郷へ戻れば、家族や友人たちが助けてくれる。

とは言え、それはラブにとってあまり気の休まる場所でもなかった。誇り高く頑固なラブは、身体障害者になっても、しっかりと自分で生きていきたかった。

そのころ娘のアマンダは、高校で知り合った男の子と結婚し、早々と息子を産んでいた。

そして物価の高いカリフォルニア州を去り、北のワシントン州へ移り住んでいる。

ラブは、アマンダの早い結婚を良く思っていなかったのだけれど、自分のことを考えると反対もできなかった。

自分も若い時は分からなかったのだから、この娘に言っても分かる

はずはないと思う。

少なくとも、娘の夫は家族を養おうと努力しているから、それで良いと思うことにする。

とにかく子供たちには、自分のような間違いを繰り返して欲しくないと思っていた。

同時に、それを子供たちに言えば言うほど、彼らを追い詰めるのも分かっている。

自分にとって、元夫は他人だけれど、子供たちにとっては父親なのだ。

だから問題や不満を言うのではなく、自分の幸せな様子を見せた方がいいに決まっている。

そうであれば、どんな状況であれ、自分はしっかりと生きていくしかない。

ラブはそう思いながら、出口のなさそうな自分の人生に、出口を捜そうとしていた。

3話 殺人事件

裁判では、ほとんどの人は自分の無罪を訴える。

他の人が真実を見極めることは難しく、

例えば、真実を話すと誓っても、嘘をつく人がいれば、ますます分かりにくくなる。

それで、有罪判決を受けた後でも無実を訴え続けることもあり、それが正しかったとしても、

ラブはその事には関わらないと決めていた。

自分の立場を利用されなくなかったからだ。

ところが、そのラブを動かす事件が起こってしまった。

ブレットは、妻のレイチエルと生まれたばかりの女の子のティナと共に、ロサンゼルス郊外に住んでいる。

その日、仕事が休みだったブレットは、ティナの世話をし、

二階のベッドルームのベビーベッドに寝かせると、しばらくの間、その安らかな寝顔を見ていた。

そこへ、玄関のドアベルが鳴る。

ブレットはレイチエルに休むように言っただけで玄関へ下りて行った。

レイチエルは、しばらくして玄関が騒がしいのに気が付き起き上がると、窓の外を見て驚いた。

数台のポリスカーが家の前に止まっているではないか。

慌てて階下へ下りて行くと、丁度その時、ブレットは警察官に連行されるところだった。

「ブレット!?!」

レイチエルが叫ぶ。

ブレットは振り返り、彼女に言う。

「大丈夫。何かの間違いだ」

ブレットは、殺人の容疑者として逮捕されてしまったのだ。

そのニュース、ブレットが麻薬密売人を殺害した罪で逮捕されたことは、すぐに報道された。

もちろん、ブレットは身に覚えがないと主張する。

逮捕される数日前、ブレットは、近道をするため街の裏道を通り抜けていた。

そして、そこで殺人が起こり、目撃者の娼婦がブレットがやったと証言したのだ。

しかも、たまたま近くに警察官もいて、ブレットがそこから立ち去るのを目撃されてしまったらしい。

裁判はあっという間に終わり、ブレットは殺人の有罪宣告を受けてしまった。

その後、ブレットは控訴し、あらゆる手を尽くしたけれど、何の進展もなく、隣の州の刑務所へ送られていた。

それは、家族や友人たちにとって辛いことだった。もちろん、彼らは、ブレットが無罪だと信じている。

そうであっても、ブレットを知らない人々は、やはりブレットが殺したのだと思っている。

そして、その冷たい目は家族にも向けられていた。

それに、ブレットには、小さな娘もいる。

家族や友人たちは、この娘の事を思うと心が痛んだけれど、どうすることも出来なかった。

そのころラブは歩く練習をしていたのだけれど、心臓も悪くなり、結局、車椅子の生活を余儀なくされてしまっていた。娘のアマンダには、女の赤ちゃんも生まれ、ラブに自分の近くへ引越すように勧めている。

息子のベンジャミンも、すでにワシントン州へ引越している。それでラブは、自分もワシントン州へ引越そうかと考えているところだった。

そこへ急に、姉のジョーンが見舞いにやって来た。

「ジョーン、私はロサンゼルスには行かないわよ」

ラブがジョーンにそう言ったのは、ラブに度々自分の家の近くへ引越すことを勧めていたからだった。

ジョーンは、少し悲しそうな顔をした後、言い始める。

「今日はね、ちょっとお願いがあってきたの」

ラブは、このジョーンの憂いた様子に何事かと驚く。

この優しくて裕福な姉に困ることがあって、しかも、身体障害者の自分に何の頼み事があるのだろうかと思う。

「メアリーって覚えている？」

「メアリー？ ああ、ジョーンの友達ね。

覚えているわよ」

とジョーンは、少し言いにくそうにする。

「メアリーの息子のブレットが、殺人の有罪判決を受けてしまったの」

「何ですって!？」

ブレットを覚えているけれど、私が最後に見た時は、まだ小さかつ

たわよね。

「いったい、どうして殺人なんて犯したの？」

「本人は、身に覚えがないって言ってるのよ。

それなのに目撃者はブレットが殺したと証言したし、警察官もブレットがそこから立ち去るのを見たって言うの」

「それで？ 私に何をしたいって言うの？」

「ラブ、あなたにこの判決を覆すのを助けてくれと頼めないのは分かってるわ」

「もちろんよ。」

「何度か私は、そんな話を聞かされたけれど係わるのはまっぴら御免よ」

「ええ、それは分かっている。」

「ブレットの家族もその判決を覆そうと努力したのだけれど、上手くいかなくて、

今は、もう受け入れるしかないと思っているのよ。」

「ただ、ブレットは、隣の州の刑務所に入っているの」

「隣の州！？」

「そうなの。」

「それで、家族としては、ブレットを訪問して励ましてあげたいのだけれど、遠すぎて大変なのよ。」

「だから、その、あなたの助けで、何とか、近くの刑務所に移してもられないかしら」

「・・・それだけ？」

「ええ、それだけよ。」

「もし良かったら、ブレットの家族に会って欲しいの、今、ここにきているのよ」

「ここに！？」

ラブは、ブレットの母のメアリーとブレットの妻、そして幼い女の子に会ってさらに驚く。それはおよそ麻薬に関わる殺人者の家族とは思えないほど、善良な人たちだったからだ。ラブは考える。

ブレットの家族、そしてこの事件、ラブは何か変だと感じている。この家族はブレットの無実を信じて疑わない。もちろん、盲目的に無実を信じたりする家族もいるけれど、この家族はそれとは違うように思える。

ラブはこの家族に、ブレットの無実を信じ、それが思うようにいかない悲しさがあるのに、なぜか穏やかな、そして強いものを感じていた。それはどうしようもないことを受け入れ、それでも自分たちに出ることをしようとしている強い姿が見えるからだ。むしる現実的で、刑務所にいるブレットを支え励ましたいと、必死に努力する美しさを漂わせている。

ラブは、その家族の思いに動かされ、そのことを引き受けようと思った。

4話 信頼

ラブがその殺人事件について「何かおかしい」と思ったのは、はつきりした理由があったわけではない。

それは、彼女の直感だった。

とは言え、それだけでは司法を動かすことは出来ない。

それにラブは、この家族と親しくはなかったし、詳しい情報を持っているわけでもなかった。

例え良く知っていたとしても、自分に出来ることが限られているも分かっている。

ラブは、もと上司だったゴードンを訪ねることにした。

その時ゴードンは、刑務所から法務省へ移動していたので、ラブは彼のオフィスを訪問する。

「ラブ、元気そうだね」

ゴードンは、気持ちよくラブを迎えてくれる。

「元気よ」

ラブは、そう答えて、ゴードンに久しぶりに会える嬉しさで顔をほころばせる。

「それで？」

僕に会いに来るなんて、何かあったのかい？」

「ええ、私のことじゃないんだけれど・・・」

とラブは言って、ブレットのことを説明する。

ゴードンは、ラブが説明し終わっても、しばらくは黙っていた。そして、口を開く。

「ラブ、君は、こんなことを頼みに来るような人じゃないよね」
「そうね。いつもなら関わらないわね」

「その君が、この事件のことを気にするだなんて、何か感じるんだ」

「私を感じているのは、この人たちはいい人たちだってことよ。

彼らは私に、ブレットを無罪にして欲しいと頼んでなんかいないわ。遠くの刑務所にいるブレットを、近くの刑務所に移して欲しいと頼んでいるの。

私だって、自分の分を弁えているから、裁判の判決をどうこうしたいとも思っていないしね。

ただそれだけよ」

それを聞いて、ゴードンはふふつと笑う。

「君らしいね。分かった。何とかしてみよう」

「ありがとうゴードン」

ラブも穏やかに笑って感謝し、それ以上のことは頼まなかった。

そのようにして、彼女は自分が尊敬するゴードンにすべてを任せることにしたのだけれど、

その彼女の姿勢はゴードンを動かすことになる。

それから時が経ち、ジョーンが電話で、ブレットが無罪釈放されることになったと言ってきた。

ラブも、そうなって欲しいと思っていたけれど、実際にそのようになるとの確信は無かったので、かなり驚いた。

そして殺人犯は、何と、ブレットを見たと言言した、あの警察官だったと聞かされる。

ラブは、さっそくゴードンに電話を掛けた。

「やっぱり調べたのね」
それを聞いたゴードンは、嬉しいのだけれど、あまり良い話でもないと云う風な口調で答える。

「君がおかしいと感じるなら、何かがおかしいんだよ。君の判断は、いつも正しかったからね。」

それで調べてみたら、警察署内に腐敗があつて、麻薬売買人との関係が明らかになったんだ。

あの警察官は麻薬密売に関係していて、交渉が決裂して密売人を殺してしまつたらしい。

そして、そこにいた仲間の娼婦に、ブレットが殺したと証言させたつてわけさ。

まあ、警察内の汚点だし、こんなことがあつてはならないんだけど、膿みは出さなければならぬからね」

「あなただから出来たことよ。」

それに私は、そんな事件に係わるなんて、まっぴらごめんだもの。本当に助かつたわ、ブレットの家族も大喜びよ」

「そうだね、僕も、無実の人間を助けることができ嬉しいよ」

これは、ラブが動かなければ解決しない事件だったけれど、ラブにとって、自分がきつかけを作つたというより、このゴードンの、自分への信頼の方が何より嬉しかった。

ゴードンは、頼まれなくても相手の気持ちを汲み、間違いを正し、きちんと行動してくれる上司だった。

ラブは、こんな上司のもとで働けたのは、自分にとって誇りだと思つていた。

歡びに溢れたブレットの家族は、ぜひラブに感謝したいとパーテ

イの招待状を送ってきた。

そして、記念のプレゼントに何が欲しいかと聞く。

ラブは、こう答えた。

「そうね、バスローブがいいかしら」

ラブは久しぶりにロサンゼルス街へ行く。

そして、感謝のパーティーで、歓びに満ちた大勢の友人たちに迎えられる。

それは、ラブにとって、自分が今まで生きてきたことのすばらしい褒美のような日で、

プレゼントのバスローブも、勲章のように思えた。

それからラブは、娘のいるワシントン州シアトルの近くの都市で、便利のいい、素敵な中庭のあるアパートへ引越す。

そこで、気立てのいいホームヘルパーの世話を受け、新しく出来た友人たちの訪問も受けたりしていた。

ラブは、その友人たちの一人、近くに住む日本人女性に、自分のことを面白おかしく話して聞かせる。

ラブの話には、辛いことがいっぱいあったはずなのに、いつも明るく楽しく話してくれるので、

うっかりすると、そんなに大変じゃなかったみたいに聞こえるから不思議だ。

ラブは、ますます心臓が悪くなり、時には起きれない日もあったりする。

そして、よくこう言った。

「朝、ホームヘルパーが来たら、私はベッドで死んでいたりして

ね。

まあ、そんな安らかな死に方がしたいものよ」

すると、その日本人女性は言う。

「それじゃあ、ホームヘルパーが可哀想よ。

ちよつとは起きててよね。

そしたら救急車を呼んで、みんなで見取ってあげるから」

このような会話をしながら二人は笑う。

そうしてラブは、自分が望んだ通りに、安らかに、60歳をちよつと過ぎた若さで逝ってしまった。

ラブはあまりにも朗らかに自分の話をするので、その日本人女性は、聞いたことを確かめるため、聞き返すこともしばしばだった。例えば、今でも思い出すラブとの会話は、こうだったりする。

” W r e e y o u r e a l l y t h e f i r s t f e m a
i l l c o r r e c t i o n o f f i c e r i n C a l i f
o r n i a ? ”

（あなたは、本当にカリフォルニアの最初の女性刑務官だったの？）

ラブは、微笑みながら答える。

” Y e s , I w a s t h e f i r s t o n e . ”

（ええそうよ、私が最初だったの）

ラブへの思い出と共に

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5612q/>

ラブの思い出 ~初の女性刑務官~

2011年2月7日11時21分発行